

評価標準化委員会 議事録

開催日時：2013年10月1日（火）

場所：(株)NTT データ会議室

参加者（敬称略）：沖、岩崎、森山、筒井、田殿、小林

■講演

[講演内容]

長崎大学森山先生から、「衛星からの地表面反射率の推定 —ASTER 大気補正アルゴリズム開発の経験から—」のタイトルでご講演頂いた。

はじめに、放射伝達と従来型大気補正について一通りの説明があり、大気補正をデータ提供側で行う例（TERRA・AQUA/MODIS、TERRA/ASTER、TERRA/MISR、ADEOS-II/GLI、LANDSAT8）と、ユーザ側で行う例（LANDSAT/ETM+、TM、MSS、NOAA/AVHRR、ALOS/AVNIR）の紹介があった。ユーザ側で行わなければならない場合、①大気状態（特にエアロゾル量）情報が入手困難である点、②同期観測による検証が不可能である点が指摘された。

次に、ASTER の絶対反射率プロダクトの問題点として①地形効果補正が無い点と②QA(Quality Assurance)情報が不足している点が挙げられた。ASTER 標準プロダクトの改定を目的として開発された大気補正と地形効果補正アルゴリズムの説明、および補正結果の紹介があった。

また、ASTER を用いた相対反射率推定手法の紹介があり、太陽幾何、観測幾何、大気状態を抑制できる相対反射率の使用が提案された。

[議論]

・高次プロダクトの利用推進について

高次プロダクトの存在はあまり知られていないのではないだろうか。使い方を説明する物を見た事がない。開発側で標準プロダクトにしていかなければならない。

・QA(Quality Assurance)について

QA という考え方は根本的に根付いてないように見える。QA や QC といったプロダクトの品質に対する考え方を取り入れていきたい。また QA 情報の積極的活用を推進したい。QA の存在を知らせる。これがエンドユーザーでのデータ使用時に効果があると思われる。

QA の精度の出し方について、QA 情報を使った、ユーザ側での研究成果の評価を報告して欲しい。

例えばモデルの入力値（反射率値）を少しずらし、その影響を把握しインパクトを計算、データのクオリティーに対するユーザニーズをまとめる等、有効ではないだろうか。

- ・標準プロダクトとしての絶対反射率の必要性について

分類目的では重要ではないが、濃度推定のような定量的な計測目的では必要になる。また衛星による観測の都度、フィールド情報を取得しに行かなくても推定できるようになる。また、ブロードバンドアルベドを求める際にも用いるので、相対反射率だけでなく絶対反射率も必要ではないだろうか。

- ・その他

地上系センサとの相補的な利用の推進や、標準プロダクトとしての平均値データ（例：一週間平均値）の必要性に関する言及もあった。

データの精度・品質関し、プロダクトやアルゴリズムに止まらず、高品質なセンサ開発の必要性や、民間で行いづらいう基礎技術開発の必要性など、日本の衛星の将来に関する幅広い議論が交わされた。

■今後について

- ・現時点で標準化委員会の HP が落ちている。

沖が飯倉先生に確認する。沖のホームページに移す予定である。

- ・各種ソフトウェアに搭載された大気補正機能の紹介を希望する。

ENVI、ERDAS、PCI 等のデモを依頼する。

- ・次回の開催について

来年の3月に開催する。場所は未定。

候補：NTT データ（豊洲）、JAXA（お茶の水）、東大（本郷）、東大生産研

以上